

先史農耕社会における富山湾資源利用史に関する基礎的研究 —富山県氷見市大境洞窟遺跡出土資料の再検討—

納屋内高史

1 はじめに

本研究は令和5年度～令和7年度において日本海学研究グループ支援事業の支援を受け、先史農耕社会というべき弥生時代を中心に、日本海沿岸でも富山湾沿岸の資源利用史を明らかにすることを目的とする基礎的な研究を行う。弥生時代は先史農耕社会といえ、弥生文化は「日本で食糧生産が始まってから前方後円墳が出現するまでの時代の文化」（佐原・金関 1975）と定義されている。本研究ではその時代の日本海沿岸における富山湾沿岸の資源利用の縄文以来の伝統とその変化を明らかにする。特に主たる分析対象を富山県氷見市大境洞窟遺跡出土資料とする。大境洞窟遺跡は国指定史跡、海辺の洞窟遺跡であり、学史的には大阪府国府遺跡とともに日本考古学黎明期に縄文／弥生の分層発掘をもって成果をあげた遺跡であり、日本国内で初めて調査された洞窟遺跡と評価されている。

本遺跡は、1918（大正7）年に東京帝国大学人類学教室の柴田常恵らにより調査され、資料は現在、東京大学総合研究博物館等に所蔵されている。しかし、大正時代の調査のため、今日的な視点からの資料の位置づけが充分になされていない現状にある。同資料を今日的な視点から分析、評価することは先史農耕文化における富山湾沿岸の資源利用史、つまりは日本海学を地域で大きく推進させることに繋がると考える。

そのため本研究は4つの方向性と目的をもち、研究を進める。

- 1）大境洞穴における生業活動を復元するため、出土縄文・弥生骨角器を重点的に分析することで富山湾周辺の資源利用を明らかにする。
- 2）大境洞穴出土動物遺存体は東大総合研究博物館及び氷見市教育委員会で所蔵される未同定の動物遺存体の同定を進め、縄文、弥生と先史時代の富山湾周辺の生態及び先史人の資源環境を明らかにする。
- 3）上記1）・2）は生業活動の復元であるが、それに加え、同遺跡下層出土縄文土器・弥生土器付着炭化物について年代測定及び安定同位体分析を行うことで洞穴利用者の古食性の復元を進め、海洋性食料への傾斜度や時期ごと、時代ごとの古食性の変化を調べる。
- 4）日本海学の視点から国指定史跡大境洞穴は富山県のみならず、日本の宝であることに間違いない。

『氷見市史 資料編5 考古』（2005）で資料は一定量図化されているが、未図化の資料も少なからずあり、その図化を進め、資料の共有化を図る。なお、上記2）の未同定動物遺存体の同定も資料の共有化の視点を含む。

2 東京大学総合研究博物館所蔵大境洞窟出土石器の調査・分析

令和7年度は、まず、令和5・6年度に行った東京大学総合研究博物館所蔵骨角器の調査成果を踏まえ、骨角器では不明確であった狩猟活動の実態を明らかにし、遺跡の総合的な生業活動の中で位置づけることを目指して、東京大学総合研究博物館所蔵石器類の調査を行った。

東京大学総合研究博物館所蔵資料については、弥生時代～古墳時代の文化層とされる3層～5層から出土したものが主体とされるものの、大正時代の調査であるため不明確な部分が多い。昨年度までに所

蔵されている 79 点の骨角器の器種、法量、素材、製作技法等について悉皆的な調査を行い、資料の出土位置、形態面の検討から資料の帰属時期や他地域との関係について検討を行った。その結果、縄文～古墳時代以降にわたる資料が含まれることが考えられたものの、その生業は遺跡形成時期を通じて外洋性の漁労活動が盛んで、様々な地域からの影響を受けていたことが考えられた。今年度は、昨年度までに明らかになった漁撈活動が、遺跡において行われた生業活動の中でどのような位置づけだったのかを検討することを目的として、出土石器の器種組成の把握を中心に調査を行った。

(1) 大境洞窟出土石器類について

東京大学総合研究博物館所蔵の大境洞窟出土資料は、1918（大正 7）年の柴田常恵らの調査（以下 1918 年調査）の際に出土した資料である。この内、石器類については、弥生～縄文時代の文化層とされる 5 層～6 層から出土したとされる。調査時の所見によれば、弥生時代の文化層である 5 層からは石棒、石包丁、石斧、石錘、砥石、石鏃が、縄文時代の文化層である 6 層からは敲石が出土したとされる。本資料は『氷見市史 資料編 5 考古』にて実測図が掲載され、資料化されているが、昨年度事業の調査の際に未掲載のものが多数存在することが判明したため、器種組成の把握を主眼に置いた調査を行った。

調査の結果、収蔵されている木箱 38 箱のうち、14 箱に石器類が含まれていることが明らかとなった。資料のほとんどは出土位置・層位の記録が残っておらず、出土状況が不明確な状態にあったが、見つかった石器類の大半は弥生土器を中心とする土器類と同一の箱で収蔵されており、また、「大境第 5 層」と記されたメモの入ったものが 1 箱発見された。このような収蔵状況やメモの存在は、5 層から石器類が多く出土したとする調査時の所見を傍証するものといえ、確認された石器類の多くが弥生時代の文化層とされる 5 層から出土したことを示唆する。

(2) 出土石器類の器種組成

資料は、形態的にほとんどの資料が縄文～弥生時代のものと考えられる。石器類は 88 点確認され、尖頭器や石鏃、石錘といった狩猟・漁労具だけでなく、打製石斧や磨製石斧等の工具類や石棒類のような祭祀具が含まれる他、石鏃・尖頭器の未製品や剥片類、石核といった石器製作に関わるものが多量に含まれることが明らかとなった（表 1）。また、遺跡周辺では産出しない石材であるヒスイの割石が 1 点



写真 1：石器類の収蔵状況と付されていたメモ

表 1：大境洞窟出土石器類の器種組成

器種	点数	%	器種	点数	%
尖頭器	5	5.7%	楔形石器	3	3.4%
尖頭器未製品	2	2.3%	凹石	2	2.3%
石鏃	4	4.5%	砥石	5	5.7%
石鏃or尖頭器未製品	1	1.1%	石刀	1	1.1%
石鏃未製品	1	1.1%	石棒類	2	2.3%
打欠石錘	3	3.4%	石核	3	3.4%
有溝石錘	1	1.1%	ヒスイ割石	1	1.1%
打製石斧	1	1.1%	剥片	15	17.0%
磨製石斧	1	1.1%	R.F.	4	4.5%
太形蛤刃石斧	1	1.1%	U.F.	14	15.9%
石匙	1	1.1%	ヒスイ玉石	1	1.1%
S.C.	16	18.2%	総計	88	

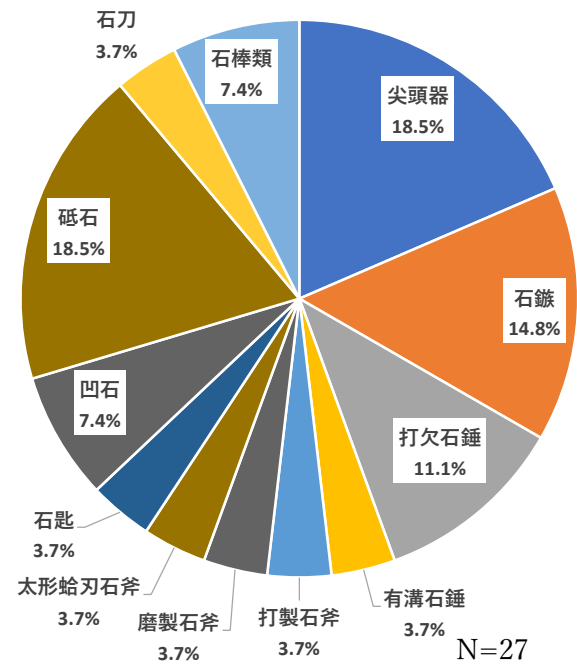


図 1：大境洞窟出土石器類の定型的な器種の組成

出土している。これについては、富山湾東岸の宮崎海岸や糸魚川周辺などの遠隔地からもたらされたと考えられる。

定型的な器種の組成を見ると、尖頭器が 18.5%、石鏃が 14.8%、石錘が 14.8%を占め、狩猟・漁労具が高い比率を占める。特に尖頭器は、その形状から槍先の可能性が考えられるものである。また、石包丁や石鎌などの農耕具は出土していない。



写真 2：大境洞窟出土石器類

(3) 石器・骨角器・動物遺存体・土器付着炭化物の安定同位体分析結果から見た大境洞窟の評価と生業活動の中における漁撈活動の位置づけ

以上のような石器類の様相と令和5・6年度事業の成果を踏まえ、出土した骨角器・石器類・動物遺存体、土器付着炭化物の安定同位体分析結果の面から、大境洞窟の性格とそこで行われた生業活動について考えてみたい。

まず、確認された石器類には、多岐にわたる道具類のほか、石器製作に関わる資料が多量に含まれたが、このことは、ある時期に、本遺跡で石器製作が行われ、漁撈のキャンプ地や墓のような特定の目的に特化した場としてではなく、一定期間人が居住する居住域として利用されていたことを示す。骨角器に弥生時代以外の時期と考えられる資料が含まれることから、資料の時期を限定することは憚られるが、資料の多くが形態的に縄文時代から弥生時代のものであると考えられること、弥生時代の文化層とされるV層から出土した可能性のあることを重視するならば、出土した石器類の器種組成は、弥生時代に本遺跡が従来の研究で指摘されていたような墓域としてだけでなく、居住域としても利用されていたことを示唆するといえるだろう。

生業関連の骨角器・石器類の組成を見ると、骨角器は漁労具がほとんどであり、沿岸や岩礁域での小型魚類の突き獲りに使用されたと考えられる刺突具（ヤス）の他、マグロやイルカ等の大型水産資源の捕獲に用いられた銚や魚鈎の部品と考えられる逆刺が出土している。また、石器類では石包丁のような農耕具や石皿・磨石のような木の実の製粉に用いられる道具は見られず、石鏃と槍先と考えられる尖頭器、網の錘と考えられる石錘が出土しており、特に尖頭器が目立つのは近隣の弥生時代遺跡に見られない特徴である。出土した尖頭器については、骨角器における逆刺の出土や遺跡立地も加味するならば、マグロやイルカ等の外洋性の大型水産資源の捕獲に用いられた可能性がある。

動物遺存体の出土傾向については、氷見市教育委員会所蔵資料では、ニホンジカ、イノシシが主体を占め、魚類はフグ科やハタ科などの岩礁・沿岸性の小・中型魚が多く、マグロ類などの大型魚類の出土は見られないが、イルカ類やアシカ類などの海獣類が一定の割合を占める。また、東京大学総合研究博物館所蔵骨角器の中にはマグロの鰭棘の可能性のあるものが含まれるほか、所蔵されている未同定の動物遺存体には魚類はハタ等の岩礁・沿岸性の魚類が含まれる他、哺乳類はイノシシ・ニホンジカを主体としながらイルカ類が一定量含まれる。

また、令和5年度に行った出土弥生土器付着炭化物の炭素・窒素安定同位体分析結果について

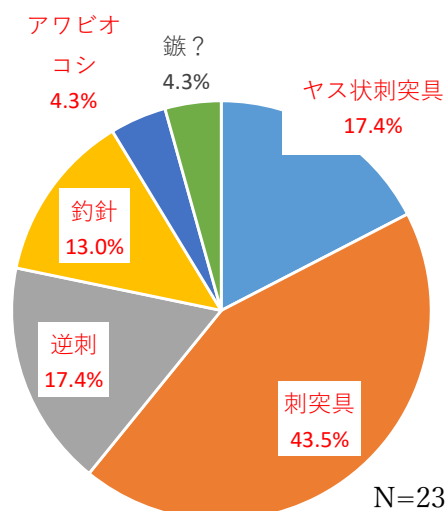


図2：大境洞窟出土生業関連骨角器の組成（弥生時代資料のみ）



写真3：大境洞窟出土の逆刺

は、陸上草食動物と海生魚類の間に値が分布し、必ずしも道具類の傾向から推測されるような海産魚類の利用に偏重した生活を行っていた訳では無いことが明らかとなっている。

このことから、本遺跡で行われた生業活動は、出土した骨角器・石器類を見る限り、狩猟・漁労活動の比重が高く、特に漁労活動に重きを置いていたことが想定できる。そして、その漁労活動は沿岸や岩礁域での捕獲に加え、沖合において大型海産資源の捕獲を盛んに行うものであったと推定できる。動物遺存体の傾向は、イノシシ・ニホンジカを主とする陸獣が主体で、マグロや海獣類などの大型水産資源の出土量が少なく、このような傾向と一見矛盾するが、出土が見られる点を重視するならば、捕獲された大型水産資源は洞窟とは別の場所で解体され、必要な部分のみが洞窟に搬入されていたと考えることができる。総合的に見ると、漁撈活動に重きを置きながらも陸獣類の利用も盛んに行っていたと評価できるだろう。この様な本遺跡の生業に対する評価は、出土弥生土器付着炭化物の炭素・窒素安定同位体分析結果からも裏付けられる。

遺跡の立地に注目すると大境洞窟は海に面した海蝕洞窟に形成された遺跡であり、周囲に農耕に適した場所は少ない。骨角器・石器類の組成が示す生業活動の傾向は、そのような遺跡立地の特徴を反映したものと見なせ、農耕に不適であったが故に狩猟・漁労活動を活発化させていたと考えられる。また、マグロ等の大型魚類やイルカ類といった大型水産資源は捕獲の難易度や危険性が他の水産資源と比べて高く、航海技術や漁労技術が十分に発達していない弥生時代以前にその捕獲を盛んに行っていることは、単に食料資源を獲得する以上の意味を持っていたのではなかろうか。想像を逞しくするならば、農産物やヒスイ、オオツタノハ等の稀少財を大型水産資源の肉などを元手とした取引により入手していた可能性も考えられる。大境洞窟における漁撈活動は、単に集落内での需要を満たすだけに止まらない意味を持っていた可能性が指摘できる。

3 日本海沿岸の他地域の弥生時代遺跡における生業活動の検討

大境洞窟の弥生時代における遺跡の性格と、そこで行われた狩猟・漁労活動の様相、そして、生業の中における漁労活動の位置づけについての検討結果を踏まえ、比較により日本海沿岸の弥生文化の中における位置づけを明らかにすることを目的として、日本海沿岸の他地域の弥生時代遺跡における生業活動の検討を行った。

これまでの事業で、大境洞窟は弥生時代において、特に漁撈活動の面で山陰地域及び北日本地域との関連性が考えられた。今回は日本海沿岸地域の弥生時代遺跡の中でも特に豊富な骨角器と動物遺存体の出土が見られ、これまでの事業で大境洞窟出土資料との類似性が見られた山陰地域の鳥取県青谷上寺地遺跡の生業活動について比較対



図3：青谷上寺地遺跡の位置



図4：青谷上寺地遺跡の周辺景観復原図
(鳥取県 HP より)

象として調査・検討を行った。

(1) 青谷上寺地遺跡について

青谷上寺地遺跡は、鳥取県鳥取市青谷町に所在する弥生時代の集落遺跡である。遺跡は勝部川河口部の海岸部まで迫った山地の谷間に形成された三角州の先端部のやや高まった場所に立地し、遺跡の東側には潟湖が広がっていたと推定されている。これまでの調査では、活動の拠点となった集落中心域や水田域が確認され、弥生時代前期後半から古墳時代前期にかけて集落が営まれていたことが明らかとなっている。また、土器や石器、骨角器や木製品、動物遺存体、人骨などが多量に出土しているほか、北部九州や北陸地域、畿内、瀬戸内沿岸など列島内各地からの交易品と考えられる遺物や中国や韓半島から渡来したと考えられる鏡やガラス小玉が出土しており、豊富な山海資源に支えられ地域の交易拠点となった集落としての姿が明らかとなっている。

(2) 石器・骨角器・動物遺存体から見た青谷上寺地遺跡の生業の姿と漁撈活動の位置づけ

石器類は 4831 点確認されており、石鏃や石錘等の狩猟・漁労具、石包丁類や磨製石鎌等の農耕具、磨製石斧や石錐等の工具類の他、各種製品の未製品や剥片・石核等の製品の素材と考えられるものも出

表 2：青谷上寺地遺跡出土石器類の器種組成

器種	点数	%	器種	点数	%	器種	点数	%
石鏃	76	1.6%	スクレイパー類	10	0.2%	砥石	1034	21.4%
石鏃未製品	31	0.6%	石匙	4	0.1%	楔形石器	82	1.7%
石錘	96	2.0%	R.F.	78	1.6%	紡錘車	7	0.1%
石包丁	47	1.0%	U.F.	7	0.1%	石矛	1	0.0%
大型石包丁	80	1.7%	磨製石斧	26	0.5%	磨製石剣	8	0.2%
大型石庖丁未成品	3	0.1%	太型蛤刃石斧	75	1.6%	磨製石剣未成品	4	0.1%
大型直縁刃石器	92	1.9%	太型蛤刃石斧未成品	4	0.1%	打製石剣	13	0.3%
大型直縁刃石器未成品？	1	0.0%	柱状片刃石斧	10	0.2%	環状石斧	7	0.1%
打製石庖丁	8	0.2%	柱状片刃石斧未成品	1	0.0%	環状石斧未成品	1	0.0%
磨製石鎌	27	0.6%	扁平片刃石斧	78	1.6%	軽石加工品	296	6.1%
磨製石鎌未成品	2	0.0%	扁平片刃石斧未成品	3	0.1%	玉類	36	0.7%
打製石斧	14	0.3%	片刃石斧	4	0.1%	その他石器・石製品	671	13.9%
磨石	52	1.1%	鑿状片刃石斧	16	0.3%	剥片	717	14.8%
凹石	55	1.1%	石錐	10	0.2%	石核	58	1.2%
敲石	778	16.1%	石錐未成品	3	0.1%	総計	4831	
台石	183	3.8%	石鋸	22	0.5%			

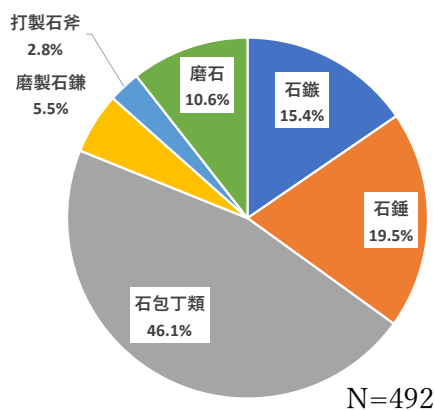


図 5：青谷上寺地遺跡出土生業関連石器類の組成

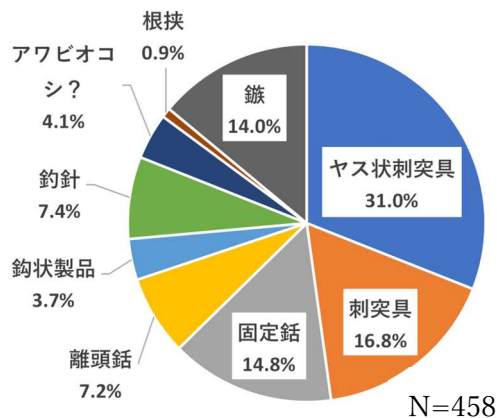


図 6：青谷上寺地遺跡出土生業関連石器類の組成

土しており、狩猟、漁撈、農耕を基盤とした定住的な生活が営まれていたことがうかがわれる。これらのうち、生業関連の道具類に注目すると、石包丁類や磨製石鎌等の農耕具が約半数を占め、狩猟・漁労具は石鏃 15%、石錘 20%と農耕具より少ないものの一定の比率を占める。

骨角器は弥生時代後期～古墳時代前期に帰属する狩猟・漁労具と考えられるものについては 485 点見つかっており、刺突具や銚頭、釣針といった漁労具が多く、骨鏃や根挾といった狩猟具も 15%程度含まれる。

動物遺存体は、魚類ではクロダイ属を中心にマダイやスズキ、カワハギ科、フグ科等、鳥獣類ではイノシシ、ニホンジカを中心にイヌ、タヌキ、ツキノワグマ等が出土しており、マグロやイルカ類等の大型水産資源は少ないようである。

これらのことから青谷上寺地遺跡における生業活動は、石包丁類・磨製石鎌の多出に見られるように稲作農耕を中心としながらも、狩猟・漁撈活動をバランス良く組み合わせるものであったと推定できる。狩猟・漁撈活動については、石鏃に対して石錘の比率がやや高いことや、狩猟・漁労具と考えられる骨角器のほとんどが漁労具で占められる点を踏まえれば、漁撈活動にやや比重を置いていたと考えられる。また、動物遺存体の面からは、集落周辺の山林と東側に広がっていた内湾性の潟が主な資源獲得域であったことが推定できる。マグロやイルカ類等の大型水産資源の出土量は少ないようであるが、骨角器に銚が一定量出土していることから、外洋性の大型水産資源を対象とした漁撈活動もある程度行われていたと考えられ、それらについては集落と別の場所で解体し、肉など必要部位のみが集落に搬入されていたことを考える必要がある。

4 日本海沿岸の先史農耕社会における富山湾沿岸地域の特徴の検討

ここまでの検討を踏まえ、大境洞窟と青谷上寺地遺跡との生業活動の比較を通じて、日本海沿岸の先史農耕文化における富山湾沿岸の資源利用の特徴について特に漁撈活動の面から考えたい。

両遺跡は遺跡周辺の農耕適地の多寡から、その生業活動には農耕を主体とするか、狩猟・漁撈活動を主体とするかという大きな違いが見られる。しかし、漁撈活動に注目して、その詳細を比較すると、まず、共通性として両遺跡とも刺突具を中心としながらも漁労具の中に大型海産資源の捕獲に用いられた銚等の道具が一定量含まれ、にもかかわらずマグロやイルカなどの大型水産資源の出土量は少ないと言う点が見いだせる。このことは、両遺跡において内湾や沿岸での捕獲を主としながらも、沖合における大型水産資源の捕獲が漁撈活動の中で一定の大きさを占め、また、それらについて肉など必要部分のみ居住域に搬入するという利用様式が共通して存在したことを示す。北陸と山陰という両遺跡が位置する地域の距離や、弥生時代における銚の出土傾向などを踏まえれば、このような共通性は弥生時代の少なくとも日本海沿岸の西半における資源利用活動、特に漁撈活動の特徴と見なせる可能性がある。

次に注目すべき差異として、骨角製狩猟・漁労具の中に青谷上寺地遺跡では銚頭が一定量含まれるのに対し、大境洞窟では確実に弥生時代のものと言える銚頭が見つからず、狩猟・漁労具と考えられる石器の中に青谷上寺地遺跡では見つかっていない尖頭器(槍)が大境洞窟では多く含まれる点が上げられる。先にも述べた様に、尖頭器(槍)は遺跡立地も加味するならば、大型海産資源を捕獲するための銚として用いられた可能性も考えうるものであり、沖合における大型海産資源漁の重視という共通した漁撈文化の基盤を持ちながらも、それに用いる道具には地域的な差異が生じていた可能性を示す。大境洞窟と同じ富山湾沿岸に所在する縄文時代遺跡の石川県能登町真脇遺跡では、槍と推定される尖頭器が多数出土し、イルカの追い込み漁の際に用いられた可能性が指摘されている(平口 2003)。大境洞窟から出

土した尖頭器が大型海産資源の捕獲に用いられたとするならば、それは縄文時代以来の文化伝統が弥生時代にも残存していたことを示すと言える。

これらのことから、日本海沿岸西半では内湾・沿岸域を主体としながら沖合における大型海産資源漁を重視する共通した漁撈文化の基盤の存在が推測されるが、少なくとも富山湾沿岸地域ではその様な文化基盤を共有しながら、縄文時代以来の伝統を色濃く残した漁撈活動が行われていたと推測できる点に特徴を指摘できるだろう。

おわりに

令和7年度事業では、昨年度までに行った骨角器の調査・研究を踏まえ、大境洞窟出土石器類の調査・分析と比較資料として山陰地域の弥生時代遺跡である青谷上寺地遺跡の生業活動の調査・分析を行い、比較を行った。

その結果、大境洞窟は弥生時代に墓域としてだけでなく、居住域としても利用されていたことが考えられ、これまでの事業成果も加味すると狩猟・漁労活動の比重が高く、特に漁労活動に重きを置いていたと考えられた。そして、そこで行われた漁撈活動は沿岸や岩礁域での捕獲に加え、沖合において大型海産資源の捕獲を盛んに行うものであったと推定できた。

この様な大境洞窟における生業活動の比較対象として、青谷上寺地遺跡の生業活動の調査・分析と漁撈活動に注目した比較を行ったところ、沿岸や岩礁域での捕獲に加え、沖合において大型海産資源の捕獲を盛んに行う漁撈活動の共通性が見られ、弥生時代における日本海沿岸西半の資源利用活動の一つの特徴と考えられた。また、大境洞窟では青谷上寺地遺跡と異なり骨角製狩猟・漁撈具に明確に銚と見なせるものがなく、狩猟・漁労具と考えられる石器に尖頭器が多数含まれることから、弥生時代の富山湾沿岸地域では日本海沿岸の漁撈文化の基盤を共有しながら、縄文時代以来の伝統を色濃く残した漁撈活動が行われていたと推測できる点を特徴として指摘できた。

令和5年～7年度にかけての事業を通じて、氷見市大境洞窟出土の骨角器を中心に生業関連遺物の基礎的データを収集することを通じて大境洞窟の再検討を行い、遺跡の性格やそこで行われた漁撈活動を中心とする生業活動、日本海沿岸の先史農耕社会における富山湾沿岸地域の資源利用の特徴をおぼろげながらも明らかにすることができた。

今後は他地域との更なる比較・検討を行うことにより、本遺跡資料を軸とした先史農耕文化における富山湾沿岸地域の特徴についての認識の深化をはかってゆきたい。

《参考文献》

- 佐原眞・金関恕 1975「米と金属の世紀」『稲作の始まり 古代史発掘4 弥生時代』講談社
- 平口哲夫 2003「日本沿岸の先史捕鯨文化」『考古科学的研究法から見た 木の文化・骨の文化』,クバプロ,pp.131-152.
- 氷見市史編纂委員会編 2005『氷見市史 資料編5 考古』氷見市
- 氷見市文化財保存会編 1957『大境洞窟遺跡と朝日貝塚』氷見市文化財保存会
- 大野究 2002『大境洞窟をさぐる』氷見市立博物館
- 同 2018『大境洞窟・朝日貝塚 100年』氷見市立博物館
- 同 2008「遺構確認調査」『国指定史跡 大境洞窟住居跡 保全整備事業報告書』氷見市教育委員会
- 河合章行編 2015『青谷上寺地遺跡出土品調査報告 10 石器(1)』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告 60,鳥取県埋蔵文化財センター
- 河合章行・君嶋俊行・水村直人・植田直見 2016『青谷上寺地遺跡出土品調査報告 11 石器(2)』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告 61,鳥取県埋蔵文化財センター
- 湯村功 2025『弥生の交易とものづくり 青谷上寺地遺跡』遺跡を学ぶ 173,新泉社